

[第15回日本言語文化研究会発表要旨]

日本語のアスペクト・テンスの習得

三村由美

0. はじめに

日本語のアスペクトとテンスを第二言語としての日本語を学ぶ学習者がいかに習得しているかをリサーチした。とくにアスペクトでは、ヴェンドラー(Vendler)のヒエラルキーを軸として、母語としての英語、日本語の習得との比較を行った。第二言語習得のみを取り上げるのではなく母語の習得との比較を行うことは、両者の類似点と相違点が明らかになり、さらに第二言語習得特有の困難さがより明瞭になると考えたからである。

1. 日本語のアスペクト・テンス

アスペクト・テンスという一般言語学的な文法範疇は、おもにインド・ヨーロッパ語の研究のなかで規定されてきたのもである。したがって、言語の系統が大きく異なる場合、それらがどのように実現しているかということがしばしば問題になる。日本語もその例外ではなく、日本語にはテンスがないという説、あるという説、そしてアスペクト形式であるとされている「ている」形についても、さまざまな説が入り乱れている。しかし第二言語としての日本語を学んでいる学習者を前にした時に、このような議論は意味を持たない。学習者が望んでいるのは、一日も早くその表現形式をマスターして実際にそれを使ってコミュニケーションすることだからである。そしてこのリサーチは実際の必要性、向学心から日本語を学んでいる学習者の学習に役立てるためのものである。このような理由から言語学、日本語学などで行われている議論は一時棚上げにして、ここでは日本語のアスペクト・テンスをつぎのように規定してリサーチを行った。

表1 日本語のアスペクト・テンス

アスペクト	テンス	非過去	過去
完結相		スル	シタ
非完結相		シテイル	シテイタ

2. ヴェンドラー (Vendler) のヒエラルキーと金田一の四分類

哲学者ヴェンドラー (Vendler) によって立てられたヒエラルキーは、アリストテレスにまでさかのぼることができる。これは、現実の事柄とそれを表す言語表現を、時間という観点から分類したものである。

表2 ヴェンドラー (Vendler) のヒエラルキーと意味素性

situations		(semantic features)			
states	occurrences		punctual	telic	dynamic
		state	-	-	-
		activity	-	-	+
		accomplishment	-	+	+
accomplishments	achievements	achievement	+	+	+

このヒエラルキーは、二つに大別される。state=状態と、occurrences=出来事で、後者は運動性の事柄で、それらが瞬時的[punctual]か、達成点があるか[telic]という二点によってさらに三つに分類されている。STATE: have, know、ACTIVITY: run, swim、ACCOMPLISHMENT: run a mile, paint a picture、ACHIEVEMENT: realize something, win a race などが例として挙げられる。

このヒエラルキーはこれまでさまざまな個別言語のアスペクトの研究の場で引き合いに出されてきた。しかし一般言語学の側からの物差しであるため、日本語学ではまだ取り入れられていなかった。しかし、第二言語としての日本語の習得を対象にした時、学習者の母語はさまざまである。また母語の影響は第二言語の習得においては無視することのできないものであることは、多くの対照研究が行われていることから明白である。そして複数の言語に共通する基準を持つことによって、学習者のさまざまな母語と目標言語である日本語との異同が明らかになり、それが日本語の習得にどのような影響を及ぼしているのかを知ることが可能になる。

さて日本語のアスペクトの研究は、金田一の動詞の四分類がある。そしてこの分類はヴェンドラー (Vendler) のヒエラルキーと重ねることができる。stateには状態動詞と第四種の動詞、activityには継続動詞、accomplishmentには継続動詞と瞬間動詞、achievementには瞬間動詞となる。そして目を引くのは、achievementに対応する瞬間動詞に「ている」が付くと、もと

もとは動作性[+dynamic]という意味素性を持っていたものが、stateに移動して状態性[-dynamic]の意味素性を持つようになるということである。日本語の場合このヒエラルキーは、achievementとstateが隣り合わせとなり、円環を成していると言える。

3. 先行研究

先行研究は、おもにアスペクトの習得についてものである。

英語の母語の習得では、認知能力が発達中である幼児が瞬間性／継続性の区別をいかにしているか、それが言語表現にいかに現れているかが問題にされてきた。Bloom et al. (1980)では、前述のヴェンドラー (Vendler) のヒエラルキーのなかのactivityに分類される動詞には接辞の-ingが、achievementに分類される動詞には-edが集中的に付与される時期があるとしている。

日本語の母語の習得でもヴェンドラー (Vendler) のヒエラルキーを取り上げている。Shirai (1993)は、activityに分類される動詞には「ている」が、achievementに分類される動詞には「た」が集中的に付与されること、そしてもう一つの「ている」形式であるachievement+「ている」が出現するのはactivity+「ている」より後であること、しかし母語の習得の場合はachievement+「ている」が1、2ヶ月のうちにactivity+「ている」の割合とほぼ同じになるとしている。

第二言語としての英語の習得でも、Robinson (1990)は英語の母語習得と同様のことが起きることをリサーチによって明らかにしている。

第二言語としての日本語の習得では黒野 (1994)が初級の中国、ベンガル、マラーティー、タイ、タミル、ネパール、インドネシア語母語話者を対象にリサーチを行い、二つの「ている」形式のうち＜動作の継続＞の用法のほうが＜変化の結果の持続＞の用法よりも習得されやすいとしている。

4. 要約

母語の習得では-ing、「ている」はヴェンドラー (Vendler) のヒエラルキーのactivityに属する動詞に、-ed、「た」はachievementに属する動詞に集中的に付与される。これは、認知能力が発達中にある幼児が、瞬間性と継続性の区別を感じながら、同時に言語を習得していることの現れであ

る。このリサーチで調査するのは、母語の習得、第二言語としての英語の習得で起こったことが、第二言語の習得でも起きているのかどうかを明らかにすることである。

5. 被験者

日本国内の日本語教育機関で学んでいる学習者121人。初級は33人、中級は50人、上級は38人。上級は日本語能力試験一級合格かまたはクローズテスト60問中40問以上の正解、初級は学習時間が350時間以内、中級は初級と上級以外とした。また、被験者の母語は約9割が韓国語で、残りの1割は中国語などである。

6. 素材

横断的(cross-sectional)に、多肢選択(multiple-choice test)方式による文法性判断テスト(Grammatically Judgements)を行った。国内の日本語学校などで広く使われている「しんにほんごのきそⅠ・Ⅱ」から、すでに学習済みの動詞を取り出して問題を作成した。以下に、アスペクトとテンスの問題の配置を表にして示す。

表3 アスペクトの問題(1項目3問ずつ、合計12問)

activity+「ている」	achievement+「ている」
accomplishment+「た」	achievement+「た」

表4 テンスの問題(1項目1問ずつ、合計12問)

位置	文末						従属節					
テンス	非過去			過去			非過去			過去		
動詞	状態	継続	瞬間	状態	継続	瞬間	状態	継続	瞬間	状態	継続	瞬間

7. 結果

7.1. アスペクト

二つの「ている」形式の正答数の平均の差は、初級、中級、上級のすべてのレベルで有意であった(初級 両側検定: $t(32)=3.64, p<.05$ 、中級 両側検定: $t(49)=7.32, p<.05$ 、上級 両側検定: $t(37)=6.67, p<.05$)。これはどのレベルにおいてもactivity+「ている」のほうがachievement+「ている」よりも習得されやすいことを表している。

また「ている」形式ごとの正答数の平均は、activity+「ている」では初級と中級との間の差が有意であったが、achievement+「ている」ではいずれのレベルの間の差も有意ではなかった。これはactivity+「ている」が初級から中級にかけて習得が大きく進むのが、全体的な学習段階が上がってもachievement+「ている」の習得はあまり進まないことを表している。

また初級のactivity+「ている」の誤答はバリエーションが多く、この時期が仮説検証の時期に当たることを示している。一方achievement+「ている」は、初級でスルとシタ、中級と上級では圧倒的にシタの誤答が多い。

二つの「た」形式の正答数の平均の差は、いずれのレベルにおいても有意ではなかった。これは、継続性+達成点を示すaccomplishment+「た」と、瞬間性=達成点を示すachievement+「た」の習得には、大きな差がないことを示している。また誤答には、特筆すべき特徴はなかった。

7.2. テンス

文末と従属節という動詞の位置によるテンスの習得に及ぼす影響は、すべてのレベルで統計的には有意ではなかった。ただし、これは文末と従属節とで、テンスが揃っている場合である。作成した問題のうち1問だけ、従属節が過去で文末が非過去という問題があった。そしてこの問題に正解した人数レベルに占めるの割合は、初級で約20%中級と上級では60%と、テンスの他の問題に較べて極端に低かった。

非過去と過去の違いでは、非過去のほうが過去よりもすべてのレベルで正答数の平均が高く、初級と中級では両者の差は有意であった（初級 両側検定： $t(32)=3.43, p<.005$ 、中級 両側検定： $t(49)=4.20, p<.001$ ）。しかし上級では、非過去と過去の正答数の平均の差は有意ではなかった。

動詞の種類では、正答数の平均がすべてのレベルで継続動詞>状態動詞>瞬間動詞という順になった。正答数の平均の差がどのレベルのどの種類の動詞の間で有意であったかを、以下にまとめて示す。

表5 動詞の種類によるテンスの習得

	継続動詞	>	状態動詞	>	瞬間動詞
初級	有意ではなかった		*有意であった*		
中級	*有意であった*		有意ではなかった		
上級	有意ではなかった		有意ではなかった		

また誤答では、初級の継続動詞の誤答のシテイルが特に多かった。

8. 考察

activity+「ている」がachievement+「ている」に先んじて習得されるのは、[+dynamic][-punctual]な意味と「ている」が結びつけられやすいからで、ここまでは母語も第二言語も同じである。しかし、第二言語ではachievement+「ている」の習得が上級になっても進まず、その誤答はシタに集中していた。これはachievement+「ている」がachievement+「た」の達成を前提とした状態の表現であることに起因すると思われる。「映画が始まっている」と言う状態はある時点で「映画が始まった」ことを前提としているため、中上級の誤答がシタに集中するのであろう。また、同じ動詞が+「た」の場合は動作性、+「ている」の場合は状態性を表すということ、さらに+「ている」で状態を表している場合でもその前提として+「た」によって表される事柄の達成が前提となっている用法は、困難であって当然だとも言える。この用法の習得の難しさは、この表現自体にその要因が潜んでいると考えられる。また黒野(1994)とほぼ同じ結果であるため、これは特定の母語としての韓国語の影響ではない。

二つの「た」形式の結果はRobinson(1990)とは違う。これは横断的調査という方法の限界によるものかもしれない。学習時間350時間までの学習者を一括りにした場合、350時間に至るまでの細かな発達過程を知ることができないからである。今後の課題としたい。

また、継続>状態>瞬間動詞という順は、人間の物事の認知の仕方と、それを言語表現とする場合に伴う、時を刻むという行為の難しさの順と一致する。継続的な事柄はしやすく、瞬間的な事柄はし難いのである。

・おもな参考文献

Bloom et.al. 1990 Semantics of verbs and the development of verb inflection in child language. *Language* 56.

Shirai 1993 The acquisition of tense-aspect morphology in Japanese. in *Arguments Structure: Its syntax and acquisition*.

Vendler. Z. 1967 Time and verbs. in *Linguistics in philosophy*.

(ゼウス外語学院)